

堺の儒学者・小山朝三について

泉 澄 一

江戸時代中期、堺の文人の一人・高志養浩はその著書『全堺詳誌』の「人物総論」の中で、小山朝三をつぎのように紹介している。

小山朝三は儒師なり。予が為にも葦葭の親族也。命世の真儒、抜群の英才と云程には至らねども、此地往古より茶事連誹の宗匠は数多あれども儒門に名を得る者一人もなし。此等の人たま／＼出生あるは誠に優鉢曇華と謂べし。幼少にて真言僧に就て読書し、中年に京都に在て難波黙庵に親炙し、其後東都に入て林学土春斎の門下に属す。因て其鸚薦を得て対馬侯へ筮仕し、韓客来聘の時館伴の員に列せり。其著述若干、先兄芝巖是を蔵む。貞享甲子病て卒す。(後略)

この文をうけて『堺市史』は

由来茶事連誹の宗匠は輩出するが鴻儒を出したことのない此地に朝三を得たのは稀代のこと、願くは郷党に止ま
って子弟を教導し、風俗の澆漓を挽回せられんことを望ましかつたことである^①。

と叙述しているが、朝三は堺が生んだ数少ない儒学者の一人であった。

ところで『堺市史』が第七卷（別巻）「人物誌」に略伝をのべているほか、管見の限り、小山朝三に関して叙述されたものを私は知らない。

江戸時代、日本・朝鮮間には国交があり、九回の通信使が来朝している。元禄二年、対馬藩につかえ、以後、朝鮮外交を通して藩儒として名をなした雨森東五郎芳洲の事蹟は、今日よく知られるところである。『全堺詳誌』の「対馬侯に筮仕し、韓客来聘の時館伴の員に列せり」の一文は、まさに芳洲の先駆を示すものであり、朝三の存在は注目に値し
よう。

以下、本稿では、今日までまったく知られることのなかった小山朝三の対馬藩への仕候、その間の経緯など、対馬宗家文庫などにのこる若干の史料からたどってみたいと思う。

一一

対馬藩では江戸時代初期から幕末に至るまで詳細な家臣奉公、人事関係記録をのこしている。宗家文庫所蔵の、その最初の一冊の表紙はつぎのようである。

寛永元甲子年	三冊之内
立身 加増	新規被召出 帰参
貞享四丁卯年迄	一番

この中に小山朝三仕候の記事がある。

延宝八年庚申年四月廿八日 小山朝三、今日爰元ニ而初而御目見仕候付、御目見列之儀朝三方（山野、奥茶湯也）松波を以相尋候付
其段遂披露候処、奥ニ相詰候医師同前ニ御目見仕候様被仰出

御勘定所大小姓御扶持増減帳ニ

一、拾五人扶持 小山朝三

延宝八庚申三月ろ被成下

但三十人扶持被仰付候へ共、十五人扶持ハ江戸ニテ渡

一、六人扶持

一、銀沓貫目

此六人扶持・銀沓貫目、天和元年辛酉六月廿五日ろ御国逗留中計被成下、三十人扶持ハ江戸ニテ被成下

以上の記事は「朱書」で上部欄外に記入されている。朝三が江戸で仕官したので、国元でのちに記入したためである。小山朝三が林春斎の推挽をうけた経緯はわからないが、『増訂対馬島誌』はつぎのようになるべたと、そのはじめに朝三をあげている。

本島古来朝鮮と通交の為、所謂儒者に非れば解し難き往復文書を要し、……徳川時代に在ては、国守は学者の招聘に比較的高禄を吝まず。^④

また『新対馬島誌』によると、^④対馬藩では寛永のはじめより『宗氏家譜』の編修を行なったが、延宝年間に至っても完成しなかった。藩主義真は天和元年、朝三にその編纂を命じたという。朝三は「藩儒」として招聘されたのであった。

江戸で仕官した当初のことはわからないが、延宝八年三月、藩主義真の帰国に同行して、朝三は対馬へ下向した。宗家文庫所蔵『御下向海陸毎日記』の延宝八年三月二十二日の条に、つぎのようにある。

日野大納言様江申ノ上刻御振廻御出被遊ル、被召連人数平田隼人、樋口孫左衛門、多田与左衛門、平田直右衛門、上川玄昌、川野松波、志賀甚五左衛門、小山朝三、嘉長也、

藩主義真の母・養玉院は日野大納言家の出身である。参勤のため江戸往来の途次、義真は京都の母の実家に挨拶に寄

るのを恒例としていた。平田隼人など家老、御用人などともに朝三も日野邸におもむいたのである。同行の上川玄昌は早く江戸で仕えた奥医師で、玄昌はその後対馬に永住し、子孫も代々藩医として仕えた。小山朝三はおそらく江戸から同行していたものと思う。

一行は四月十四日、無事対馬に着いた。そして四月二十八日、藩邸で「初而御目見」となるが、先掲の人事記録の記事は実は国元の「表書札方毎日記」をもとにしたものである。「表書札方毎日記」は藩政日記の中心をなすもので、江戸時代初期から明治初期に至るまで、そのほとんどが現存している。以下、この「表書札方毎日記」を中心に朝三の事蹟をたどろう（とくに断らない限り、「毎日記」は表書札方毎日記のこと）。

延宝八年八月六日、毎年恒例となっている祇園会神事能が藩邸で催された。これには日朝外交の書契を監察する以酩庵の輪番和尚（京五山から派遣されてきている）が主賓として招かれる。輪番和尚の中にはすでに五山住持職の経歴をもつものもあり、その地位は非常に高かった。対馬藩でもその処遇に大きな配慮を払っている。当時の以酩庵和尚は東福寺塔頭本成寺の南宗祖辰で、延宝元々三年につぐ二度目の輪番をつとめていた（すでに東福寺第二百四十二世住持をへている）。はるばる京都から下向する輪番和尚にとって、この神事能は無聊を慰めるなによりのものであった。毎日記には

以酩和尚并西山寺長寿院勲首座被参、松波、朝三御挨拶申上ル

とあり、朝三が南宗祖辰に会っている。朝三は奥医師格ではあるが、いまは別格の「藩儒」として以酩庵和尚に会っているのである。このあと、たびたび藩主と以酩庵を訪問したりしているが、朝三の藩内での地位を示している。なお、以酩和尚と同席の西山寺・長寿院とは、対馬の臨濟寺院で、以酩庵の賄役、書契の清書役などをつとめていた。したがって、こういう場合、必ず同席することになっていた。

八月の末に藩から屋敷も与えられた。藩儒としての生活に少し慣れたのか、閏八月十一日、朝三は長髪を願い出た。

四季共ニ不刺様ニ与之御事

として、許可がでている。

九月になり重陽の祝事とて、藩主が以酊和尚を藩邸に招いて御馳走することになった。平田隼人、樋口孫左衛門ら老、西山寺とともに朝三も相伴をしている。席上、以酊庵和尚から朝三の出身地・堺に関する話もたかと思われる。堺には東福寺の末寺、海会寺や大安寺がある。海会寺は南宗祖辰の法祖・乾峯土曇、大安寺は法兄・徳秀土蔭が開山となった寺で、いずれも中世らしいの由緒ある寺院である。いま大安寺には南宗の筆になる山号「布金山」の扁額もあり、南宗と堺とは決して無縁ではない。

十一月になって、綱吉の將軍宣下御祝のため、藩邸で能が催された。

以酊庵并年寄中諸役之面々、其外二百石以上、其外家中不残見物

とある。むろん朝三もでていたが、なおその朝、以酊庵へ「口切の茶」進上のお茶事があり、これにも朝三は相伴をしている。このお茶は対馬藩が宇治からとりよせるもので、毎年十一月初めごろにおこなわれた。宇治茶師の峯順竹庵、松久道恵らは、ときに藩から真鶴などを贈られるような間柄であった。朝三も久しぶりに故郷近くの宇治の茶に、心暖まる時間を過したと察せられる。

年が改まり延宝九年二月、朝鮮から訳官一行が来島した。この訳官は、帰国した藩主への挨拶、家綱の死への吊意、綱吉の將軍就任への祝詞を兼ねた使節で、江戸まで至る信使とちがって対馬止まりである。江戸時代、こういう訳官の来島は五十回を越えた。綱吉の將軍就任で朝鮮信使の来日も決まった。いずれ藩儒として信使の応接を担当する朝三が、訳官応接の席にでていたと思われるが記録がのこっていない。この訳官来島時に珍らしい記事がある。

訳官宿之門外之番所江田舎足軽四人相詰候処、朝鮮人唐人人参を右之番所江投込申候

というもので、人参密売買事件があった。朝鮮語を少し解する足軽の一人が疑われ詮儀があったが、いかにも国境の島らしい事件である。朝三がこの事件を耳にしていたら、対馬にいることを改めて認識したことであろう。

六月になり以酊庵に交代の和尚、相国寺光源院汝舟妙恕が到着した。南宗祖辰は二年の勤番を終えて京へ帰った。

六月末、年例送使の朝鮮へ持参した書簡に不備があったらしく、使者が釜山から帰ってきた。早速、小山朝三に相談があり、以酏庵へ書簡を持参、書き改めてもらうことになった。小山朝三には文章上のことで相談があったのである。以酏庵では翌日清書をすませ、和尚自身が藩邸まで持参してきた。かねて準備があったようで、書院で藩主の接待があり、朝三が相伴している。

七月になって、また屋敷替えがあった。朝三は「相様之者」が居住した屋敷へかわった。信使来日が近くなり、藩では前回（明暦元年）の信使記録を蔵出しして、閲覧するなど用意をはじめている。毎日記にも関係の記事が多くなり、諸事役目の書付も係へ渡された。

十月になり訳官が来島した。信使一行の細目打ちあわせのための講定訳官である。その接待があったが、以酏庵和尚は気分すぐれず欠席した。和尚はかなり様躰がわるかったらしい。十月十二日、藩主の使いとして家老田嶋左近右衛門が以酏庵を見舞った。翌十三日の毎日記には

上方江御登被成敏と御養生被成可然思召候段申入候処ニ、御返事ニ被仰候者御懇忝存候、併爰元ニ而之養生無残所、其上珍敷菓種御菓等致拝領心儘養生仕候条、罷登り候儀何ケ度も御断申上度と之儀ニ御座候、殊只今少快御座候条、養生仕可相勤与之御事ニ御座候

とあって、田嶋左近右衛門は

色々申入候得共、曾而御承引無御座候

と報告したのであった。汝舟妙恕としては信使の来日をひかえ、不時の交代はなるべく避けたかったのであろう。もし交代が決つても、その到着にはかなりの日時を要する。汝舟の苦衷も察せられる。しかし、病状は回復しなかった。十九日なり、藩へ以酏庵から使いがきて、

此分ニ而者俄ニ快氣難成候間、年内者余曰無御座候、明春迄相替之儀無御座者、春ニ成上方江登り候而養生被加度候

と口上をのべた。藩主はすぐ以酩庵へおもむき「対馬守として老中及び金地院（南禅寺）へ交代願いを申し出る」旨、のべている。

なお、藩主は病状重しとみて、急ぎ長崎から医師を招くよう係に手配をさせ、十一月初め牟田口友庵が来島した。その接待に小山朝三は奥医師上川玄昌らと相伴している。以酩庵和尚の病気に、上方出身の朝三は心痛む想いであつたらう。藩では臨時に人参一斤を届け、なお町医師にも命じて以酩庵へ詰めさせた。

しかし、十一月二十六日の毎日記は

以酩庵惣長老巳ノ刻御遷化被成候

と記す。着任五か月で汝舟妙恕は任地に逝った。藩では城下の謡、乱舞を三日間禁止して哀悼の意を表し、法事を営んだ。

この間、朝三は再び屋敷替えとなり、大浦太郎兵衛屋敷へ移った。信使来日をむかえ、よい条件の屋敷を与えられたのであろうか。

以酩庵和尚の忌があげ、十二月三日、下屋敷で奥医師らにお茶、料理の振舞があつた。朝三も招かれた。

ところで『新対馬島誌』によると天和元年、この年に朝三に命じられた『宗氏家譜』は、また完成しなかつたとある。鈴木棠三氏はこのことについて、

このように再三（『宗氏家譜』編纂が）不成功に終つた理由として想像されるのは、宗家の出自をどこに求めるかという方針が一決しなかつた故ではないか。

とのべておられる。残念ながら「毎日記」には、この間の経緯に関する記事がまったくくない。朝三がどの程度まで家譜編纂を進めていたのか、まったく徴すべき史料なく不明だが、不成功の理由は宗家の出自云々だけではないと思う。

前年延宝八年五月八日、したがって朝三が来島してまもなく將軍家綱が死んだ。当然、新將軍就任で信使来日が予想される。事実、天和元年は藩でもその準備に追われていた。『家譜』不成稿の理由の一半は、不時の信使来日にあつた

のではなからうか。

年が改まり天和二年、信使来聘の年となった。「毎日記」一月二十九日条に

小山朝三、(巻改)沓州江湯治之儀願之通御暇被成下候、再御銀十枚被成下候事

とある。沓岐は湯本に温泉があり、対馬から湯治によく出かけた所である。なにゆえ朝三が湯治を申しでたのかわからないが、あるいは少し思っていたのであろうか。記録はないが、朝三は蒲柳の質だったのか、とも思われる。

三月になり、以酏庵へ相国寺慈照院太虚顕靈和尚が赴任してきた。信使来日の折とて、以酏庵との諸事打ちあわせに藩から小山朝三がでていたと思われるが、この時期(天和二年一・三・四月)の毎日記は欠けていて詳細がわからない。

つづいて五月に以酏庵加番和尚の天龍寺妙智院蘭室玄森が到着した。信使来日的时候は、以酏庵和尚も一人増員となり、江戸往復をともにする。五月十日、本番・加番両和尚を藩邸へ招き接待があった。相伴に小山朝三も招かれた。

記録はないが、朝三と蘭室玄森との交流の中で、おそらく話題になったと思われる人物がいる。蘭室の弟子・中山玄中で、のち二回以酏庵輪番となり、天龍寺第二百九世住持にもなった(あるいはこの時蘭室に同行して来島していたとも考えられる)。なかなかの学僧であった。中山は堺の豪商平野屋の出身で、先出の堺大安寺にも関係深く、朝三は先の南宗祖辰のときにもまして、故郷堺にふれる話題に心をなごませたにちがいない。

六月三日、信使一行が釜山を出発したとの報告が入った。折しも蘭室が病氣となり、九日には

森長老気色驗気無之曰増ニ悪舖候ニ付、只今之気色ニ而ハ暑氣之時分道中之勤無心元存候

と伝えられた。藩では以酏庵と相談のうえ、急ぎ老中と金地院へ代僧派遣を申しでた。このころはまだ以酏庵輪番には高年の僧が当てられていた。まだ朝鮮外交上の法式も整わず、高位の見識豊かな和尚をのぞんだからである。それゆえ健康上の不慮の事故も多かった。

代僧にはなんと先の東福寺南宗祖辰が当てられることになり、南宗は信使一行を大坂で待つことになった。

六月十六日、年例嘉定の祝事があり、上士の面々が出席したが、朝三も参列している。

二十四日、信使一行が府中（厳原）に到着、朝三は家老とともに正使・副使を見舞った。信使を宿舎に見舞う先例はなかったらしいが、「此度ハ見廻候而可然（「毎日記」）」ということになり、朝三も長袴を着てでかけた。いよいよ藩儒・朝三が藩の文事を代表して活躍する場が到来した。

朝鮮側でも信使行に際し日録をのこしているが、この時の『辛酉信使日記』によると、わずか二か所だが朝三が記録されている。六月二十五日、朝三は家老、裁判役（外交担当の藩士）らと使節を訪問した。その記事に、

僧人朝三号守中馬島
主管文書僧

とある。明らかに朝鮮側では、朝三を文事担当の儒者として把握していた。「僧人朝三」とあるが、この時剃髪していたのであろうか。また朝三が「守中」と号したことも知られる。

二十六日には朝鮮人の曲馬があり、朝三も見物を許された。また判事（通訳官）などの会席もあり、朝三も多忙の日々を送っていた。

七月一日の『辛酉信使日記』の記事には、

午後藩主島主（以前藩主）与（以前藩主）靈僧及常朝二僧、来謁館所、

とある。同行の「常朝」がそれで、常は西山寺の梅山玄常、朝が朝三である。ここでも以酌庵和尚とは別に藩の文事を代表する朝三が知られる。

七月八日、藩主・藩士・朝三らは、四百七十余名の使節一行とともに対馬を出発、江戸へ旅だった。江戸往復中の朝三については別稿にゆずるが、信使滞日中の朝三の事蹟について一、二ふれておきたい。宗家文庫所蔵『年寄中預御書物長持入日記』と書かれた記録の中に、つぎのような記事がある。

一、天和壬戌二年朝鮮之信使来聘之節、小山朝三朝鮮本輿地勝覽を相考仕立候

『輿地勝覽』はおそらく一五三〇年改編された朝鮮の人文地理書『新增東国輿地勝覽』のことで、対馬藩にとっては

必要欠くべからざる書籍である。この朝三の仕立てた与地勝覽は、朝鮮国絵図などといっしょに袋にまとめられていた（現存しない）。さすが対馬藩に仕えるだけに、朝三には朝鮮及び朝鮮書籍に関する知識があったわけで、またこれ以外に朝三の手になる記録などあったかもしれない。

つぎに『堺市史』にも略述されているが、『通航一覽』巻之百十にある、朝三の信使との交流を伝える記事をあげよう。

天和二年壬戌八月廿一日

一、朝鮮国の三使名は、尹趾完、李彦綱、朴慶俊といふ者江戸に來朝す、（繪川）光圀公是を聞給ひ、林春常方へ仰被遣候は、朝鮮の三使江戸滞留の内、彼是御問被成度由、夫より案内給はるべきとの御事也、依之春常より宗対馬守義真の家来小山朝三と、内藤左京亮の家来大高清助と兩人に、右の思召の段を達せられ候に付、光圀公御家来今井小四郎正興、中村新八願言、并森指月此三人を被遣候処に、小山朝三又対馬国の町人加勢五右衛門通辞として、右兩人朝鮮の学士成琬と言者数度参会いたし、其外宮鄭牛俊、又は金指南、印劍賞、鄭文客などと言者に対談いたし、禽獸草木地名器物国字等の事、其外被仰付候事共を相尋、折々の参会なり。

信使一行の文人代表は製述官（学士）の成琬である。成琬は九回の信使同行の学士の中で、三指に入るすぐれた人物であった。藩の文人代表・朝三は成琬と漢詩文で対応しなければならぬ。現に光圀の質問を通辞とともにとり計らっている。今日、朝三の遺文に接しえないが、朝三は相当の実力をもっていたと解してよからう。それを証明するかのよるな記事が、もう一個所『通航一覽』巻之百六にある。長文なので割愛するが、『堺市史』からその要旨をひいておこう。

使節が光圀に方物を贈ったが儀及ばざるところあり。光圀これを詰責せしめた。事情の困難さに通辞はこれを避けしたが、朝三が代わって折衝に当たり、使節は無礼を陳謝した。^⑩

というものである。『堺市史』は「爾來信使の弊風を改め得たのは、朝三等の功績である。」と結んでいるが、理を叙述

しえた朝三を読みとるべきであろう。信使としても相手に理があれば、非を改めるにやぶさかではなかった。しかし、後年の藩儒・雨森芳洲の例からみて、朝三の苦勞はなみ大抵でなかつたにちがいない。なお、同行の以酹和尚にもふれるべきだが、『東福寺誌』天和二年八月二十七日条の記事をあげて、あとは別稿にゆずりたい。

朝鮮来聘正使尹趾完、副使李珍綱等江府に着す。東福寺南宗祖辰等之に接待す。

朝三は南宗祖辰と一年ぶりの再会であった。大坂から江戸へと往復した南宗祖辰と朝三との交流については改めて考えてみたい。

三

使節行は無事終わった。十月七日、藩主以下同行の藩士たちは信使ともども対馬へ着いた。信使一行は休息をとったのち、十月二十六日未の刻、府中（殿原）を出帆、帰国の途についた。対馬北端の鰐浦から釜山へ向けて出発の三使は、藩主に一書をよせ多大の好意を謝した。首都ソウルから半年におよぶ旅をつづける使節も大へんだったが、それだけに対馬藩の労苦をよく知っていた。

対馬藩では信使護衛の負担も大きかったが、江戸での儀式の進行いかんは、より大きな精神的負担であった。いまそれが無事終わり、十一月十五日、祝宴があった。毎日記はつぎのように記す。

今度信使首尾能相済候、為御祝衷御家中御振廻、御能御興行見物被仰付ル、馬廻り（上士）大小姓（中士）一汁三菜料理被成下ル

この席にはむろん以酹庵和尚も招かれた（南宗祖辰は大坂から帰京）。

以酹庵御出并同宿御小姓共ニ於御座御能見物、四番相済而御料理出ル、相伴万松院、西山寺、小山朝三とある。万松院は藩主・宗氏の菩提寺である。このあと「御祝儀」の記事がつづく。

七拾石御加増 都合六百石樋口孫左衛門^{（家老）}

以下、八十一名の名がならぶ。小山朝三はその四十一番目、銀十枚が与えられた。賄役頭と同額であった。翌十六日、藩主直々に馳走があり、小山朝三は組頭平田所左衛門と同席で二汁七菜の料理を振舞われた。信使行での朝三の功績が認められていたのであろう。

年が改まり天和三年となった。朝三も三度目の対馬の正月を迎えた。藩主のお狩初めの行事があり、家中のもの三十人に獲物の鹿が贈られた。小山朝三はその二十一番目、鹿足二本を贈られた。

藩儒として地位を得た朝三だったが、正月二十七日「毎日記」はつぎのように記す。

小山朝三、江戸江御暇願之夏

右之趣申上候処、弥申付候様ニ与加納幸之助を以被仰出、則組頭田島十郎兵衛を以申渡

何分これだけでは事情がよくわからないが、朝三は思いもよらなかった朝鮮信使応接の大役を無事終えた。と同時に改めて江戸での学問を志したのであろうか。藩主もまた、いっそうの学問成就を期待したのかも知れない。しかし、せっかく『宗家家譜』の編纂という偉大な業績を前にしながら、業半ばで対馬を去ったのはまことに惜しまれる。船便をまち、二月初め朝三は対馬をたった。毎日記、二月二日条に

小山朝三江戸表江罷登候付、樋口佐左衛門并京大坂江之書状相渡ス

とある。その道中については記録なく、江戸着の日時もわからない。途次、堺へたちよったことも考えられる。対馬藩では江戸藩邸日記の控を国元へ送っていたが、宗家文庫には天和三年分の「江戸毎日記」が欠本で、詳細がわからない。江戸着後、藩儒として生活を送っていたことはまちがいない。

翌貞享元年五月四日、江戸表書札方毎日記につきのような記事がある。

(光西)

水戸宰相様驟馬牝牡二疋御所望被成度之由、小山朝三方迄中村新八与申人を以仰遣候由、朝三方より申来候付而遂披

(本半藩儒)

露候処、水戸様御用御座候間、朝鮮ニ詔被遣御披露可被遂候、乍去一疋さへ出来兼申候つかい候て二疋ハ調兼可申候、牝斗成共肝煎才覚候而早々差渡候様可被仰遣候、国定可相調段不相知候段、兼而新八殿迄披申遣置候様ニと朝

三方へ返事申遣、則今日白木左兵衛便御国へ申遣ス也

対馬藩へ將軍家はじめ諸大名などから、このような朝鮮産生類の注文が多かった。一番は何といつても鷹であるが、騾馬の注文は珍らしい。そのほか釜山窯（対馬藩の御用窯）への焼物の注文が知られる。

中村新八（願言）とは、ともに何度か朝鮮信使に接した間柄で、中村新八が朝三に相談をもちこんだのであろう。この注文には対馬の国元でも困ったらしいが、注文通り十二月に江戸へ送り届けられた。

五月十八日の毎日記の記事は管見する限り、小山朝三に関する最後のものである。

小山朝三三人人參老斤買度之由小田孫六方申越候由年寄中へ申聞ル、朝三事病氣罷ニ有入用可有候段遂披露候処ニ、人參十匁拜領被仰付之旨被仰出候故、朝三方へ持せ遣之

これ以上に詳しい事情はわからない。朝鮮人參を求めるほどだから、かなり病状が悪かったのではないか。『全堺詳誌』には「貞享甲子病て卒す」とある。『全堺詳誌』が何によって没年を記したのかわからないが、管見の限り対馬藩の諸記録の中に朝三の死を伝える記事はない。その忌日および死没の場所は、いま不明というほかないのである。

四

『全堺詳誌』を著わした高志養浩は堺の名家の出身である。養浩の兄芝巖は堺の惣年寄を勤めること三十年、町民から大きな人望を得ていたという。『全堺詳誌』はかつて芝巖が編述しておいた地誌一冊を、養浩が補完して本としたもので、兄弟とも学者であった。『全堺詳誌』の初めに「朝三は予が為にも葦葭の親族也」とあるが、いまこの名家とどのような系譜上のつながりがあるのか、よくわからない。

また『堺市史』は「朝三が」堺九間町に住した」と伝えるが、これをたどる史料もない。元禄二年の『堺大絵図』には、九間町に「小山屋惣左衛門（間口五間×奥行六間）」の名がみえるが、朝三の縁者であろうか。その菩提寺もわからず、朝鮮使節の応接に当たった文人の、出身地・堺に徴すべき史料のないのはまことに惜しまれる。

朝鮮使節との交流といえ、漢詩文の応酬がある。江戸時代も中期をすぎると、この応酬詩の出版も盛んとなるが、朝三の時代にはまだおこなわれていない。あるいは応酬の詩文がどこかに所蔵されている可能性もある。

ところで国交回復後半世紀もすぎると、日朝間も安定した時期にはいり、信使の来日にも文化交流の意味あいが濃くなってきた。朝鮮側でもすぐれた学士を送るようになり、対馬側でもそれに対応する必要にせまられた。これが外部から儒学者招聘となり、当初の目的は家譜編纂であったかも知れぬが、結果的には小山朝三がその最初となった。おそらく朝三の評価は低くなかったものと思われる。というのは対馬藩では、このあと貞享三年大坂から塩川伊右衛門、元禄二年雨森東五郎芳洲を招く。そしてこの招聘はいずれも成功で、対馬の文運大いに栄えた。いわば朝三が塩川伊右衛門・雨森芳洲をひき出したのであり、その功績は大きかったといわねばなるまい。

最後に『全界詳誌』の後半、小山朝三を惜しむ文章をかかげて本稿のむすびとしたい。

嗚呼此人禄仕ある事、自分に於ては幸と云べけれども願はくは父母の国を去る事なく、京郷の子弟を教導し風俗の澆漓を挽回し門下の英才を跡に遺しめ然して後去て仕官あらねば十全たるべし。然れども何を云んにも当津などは儒学の事一向に民間に其沙汰を問事なく、たまたま僧侶の法談に仁義の名目、五倫の面影を片言まじりに演説し、終には仏道へ引墮すの手談とする故に、儒仏混雑して諸人其差別さへ知ざれば朝三如きを留置て宝とする事を願す。左伝に曰く雖楚有材、晋实用之とは此等の事なるべし。

註

- ① 同書第三卷六五六頁。
- ② 同書一五七頁。
- ③ 同書一六三頁。
- ④ 同書三四五頁。
- ⑤ 前注に同じ。
- ⑥ 鈴木棠三編『對馬十九公実録・宗氏家譜』對馬解題。
- ⑦ この時から加番和尚は信使一行を大坂で迎え、江戸往復をともにし、大坂で別れ京へ帰るようになった。
- ⑧ 釜山甲寅会編『日鮮通交史』三八〇頁。
- ⑨ 前注同書三二二頁。
- ⑩ 同書第七卷三二七頁。